

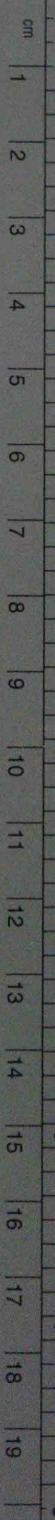
40442

教科書文庫

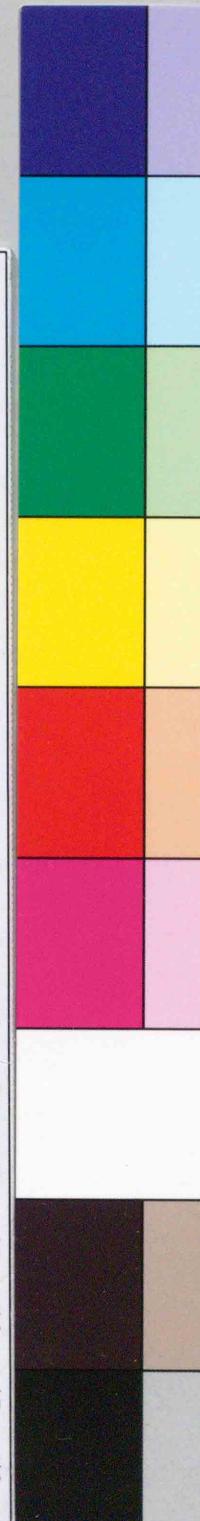
4
110
31-1927
2000.0
18263

**Kodak Gray Scale**

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak 2007 TM: Kodak

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak

文  
增  
省  
第三回  
復  
修  
校  
用  
中



4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

375.9  
M014

教科書文庫

4  
110  
31-1927  
2000018263



文部省

広島大学図書

2000018263



複式編制學校兒童用甲  
第三四學年  
尋常小學修身書

もくろく

かうかう	きやうだい	兄弟	三	一
べんきやう			六	
きりつ			十	
ともだち			十三	
れいぎ			十四	
くわんだい			十七	
けんかう			十八	
ゆうき			十九	
こころざしをかたくせよ	二十三	第十四	三	二十七
ことごとにあわてるな	二十五	第十五	三	三十
じりつじえい		第十六	三	三十二
ちゅうくんあいこく		第十七	三	三十六
明治天皇		第十八	三	四十
祝日大祭日		第十九	三	四十一
しゃうぢき		第二十	三	四十二
けんやく		第二十一	三	四十三
近所の人		第二十二	三	四十四
こうえきをはかれ		第二十三	三	四十五
生き物をあはれめ		第二十四	三	四十六
はくあい		第二十五	三	四十七
めしつかひ		第二十六	三	四十八
よい日本人		第二十七	三	四十九



西漢  
四  
固  
安

第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十二 第十二

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ  
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我力臣民克ク忠ニ克  
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル  
ハ此レ我力國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實  
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦  
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及  
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器  
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲  
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉  
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ  
ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ  
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我力皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫  
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬  
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ  
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

第一 かうかう

複甲三四

むかし播磨はりまにおふさいふかうかうなむすめがありました。八つの年から子もりなどにやとはれて、くらしをたすけました。又九つ十のころには、父がざうりやわらぢをつくるそばで、わらをうつて手つだひました。十一の時からほうこうに出ましたが、じゆじんからいただいた物は父母におくり

ました。又ひまがあれば、しゅじんのゆるし  
をうけて家へかへり、ふたおやをなぐさめいたはりました。

おふさはかやうにおやをたいせつにしたので、りやうしゆ



から、ごはうびをいたしました。

孝カウハオヤラヤスンズルヨリ大イナルハナシ。

第二 かうかう

渡邊わたなべ登のぼるは十四さいのころ、家がまづしい上に父がびやうきになつたので、どうかしてうちのくらしをたすけて、父母の心をやすめたいとかんがへました。登ははじめがく

しやにならうとおもつて、がくもんをべん

きやうしてゐまし

たが、ある日人から  
「ゑをかくことをけ  
いこしたら、くらし  
のたすけになるだ  
らう」とすすめられ、  
すぐあるせんせい



について、ゑをならひました。

父は二十年ばかりもびやうきをしてゐま  
したが、登はその長いあひだ、かんびやうを  
して、少しもおこたりませんでした。父がな  
くなつた時、大そうかなしんで、なきながら  
ふでをとつて、父のかほかたちをうつしま  
した。さうしきがすんだのちも、朝ばんきも  
のをあらため、つつしんで父のゑすがたに

はいれいをしました。

第三 兄弟

きやうだい

登の弟やいもうとは  
みなはやすくからよそ  
へやらされました。八つ  
ばかりになる弟がほ  
かへつれて行かれる  
時、登は弟のふしあは



せをかなしんで、雪がふつてさむいのに、と  
ほい所までおくつて行つてわかれました。  
弟がしらない人に手をひかれ、うしろをふ  
りむきながらわかれで行つたすがたが、あ  
まりにかはいさうであつたので、登はいつ  
までもその時のことをおもひ出してなげ  
きました。

兄弟ハリヤウ手ノゴトシ。

第四 べんきやう

登はさきに人のすすめにより、あるせんせいについて魚をならつてゐました。が、おれいが十ぶんにできなかつたため、二年ばかりでことわられました。登は力をおとしてないでゐたら、父が「これぐらゐなことで力をおとしてはならぬ。ほかのせんせいについてべんきやうせよ」といひました。

登は父のことばにはげまされて、ほかのせんせいについてならひました。そのせんせいはよくをしへてくられられました。から、登のわざはだんだんすすみました。そこで登は魚をか





が、日日のしごとをさだめて、朝ひるばんの  
じこくにわりあて、  
それをかでうがき  
にして、そのとほり  
おこなひました。こ  
のやうにきりつた  
だしくしたので、ゑ  
が大そう上手にな

複甲三四

いてそれをうり、うちのくらしをたすけながら、なほなほゑのけいこをはげみました。  
又その間にがくもんもしましたが、ひまが少ないので、毎朝はやくおきて、ごはんをたき、  
その火のあかりで本をよみました。

カンナン、ナンデヲタマニス。

第五 きりつ

登はそののち重い役に取立てられました

複甲三四

つたばかりでなく、がくもんもすすんで、元  
らい人になり、せけんの人人からうやまは  
れるやうになりました。

第六 ともだち

むかし細井平洲といふがくしやがありま  
した。小川天門といふともだちが子どもを  
つれてたよつて來た時、よろこんでうちに  
とめておき、又天門が國にのこしておいた

つまと子をよびよせさせました。そののち  
たづねて來た飛鳥  
圭洲といふどもだ  
ちも、うちにおいて、  
長い間いつしよに  
くらしました。天門  
も圭洲も平洲の父  
にはじぶんの父の



複甲三四

やうにしたしみ、平洲とは兄弟のやうになかよくしました。

きんじよの人たちはそれを見て、はじめはまことの兄弟だとおもひ、中には平洲の父に多くの子やまごをおもちになつて、うらやましいことです。といつたものもありました。

## 第七 れいぎ

上杉鷹山うへすぎようざんは平洲をせんせいにして、がくもんをしました。ある年平洲をじぶんの國へまねきました。鷹山はみぶんの高い人であつたけれども、わざわざ一里あまりもむかへに出て、ある寺の前で平洲をまちうけて、いねいにあいさつしました。それから休まうとして寺へ行きましたが、長いさかみちをのぼつて行くのに、鷹山は一足も平洲よ

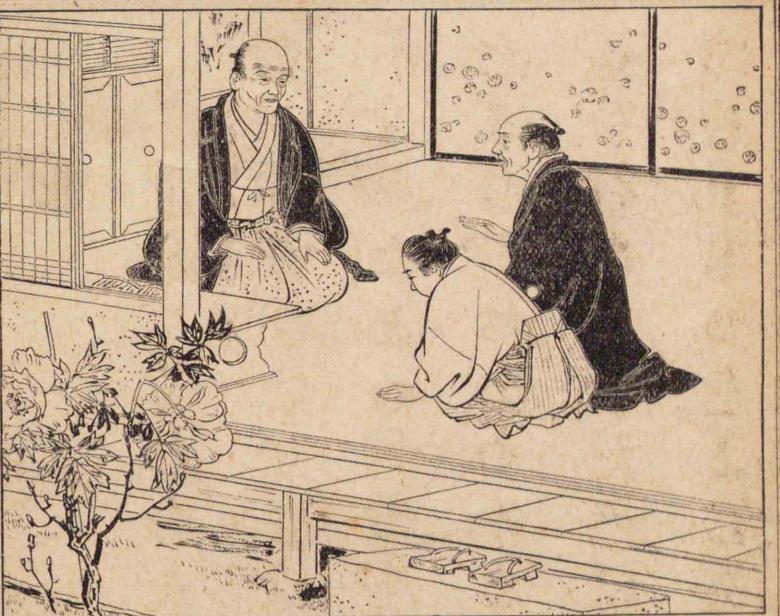
りさきへ  
出ないで、平  
洲がつまづき  
ころばないやうに  
きをつけ、手をひくば  
かりにちかくならんて  
すすみました。又寺につい  
た時、ていねいに平洲をあんない



して、ざしきへとほし、心をこめてもてなし  
ました。

第八 くわんだい

昔貝原益軒といふなだかいがくしやがありました。ある日るすの間に、一人のでしが、となりのわかものと、にはですまふをとつて、益軒がたいせつにしてゐたぼたんの花ををりました。ではせんせいがはらをた



てられるだらうとし  
んぱいして、そのかへ  
りをまちうけ、となり  
の主人にたのんで、あ  
やまちをわびてもら  
ひました。益軒は笑つ  
て、「じぶんがぼたんの  
花をうゑたのはたのしむためで、おこるた

めではない」といつて、そのままゆるしました。

### 第九 けんかう

益軒は小さい時には  
からだがよわかつた  
ので、つねづねやうじ  
やうをしました。色々  
のしよもつをよむをり

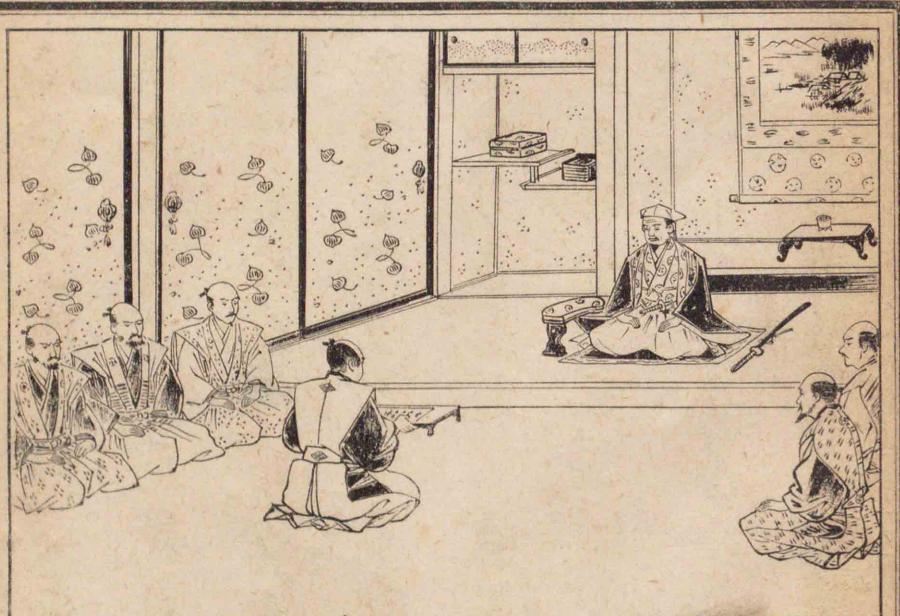


に、やうじやうのことがかいてある所があれば、かきぬいておいて、そのとほりまもりました。それでからだが次第にぢやうぶになつて、年をとつてもおとろへず、八十五さいまでも長生をして、多くの本をあらはすことが出来ました。

### 第十 ゆうき

木村重成きむらしげなりは豊臣秀頼とよとみひでよりのけらいでゆうきの

ある人ひとでありました。秀頼ひでよりが徳川家康とくがはいへやすといくさをした時、重成は二十さいばかりでありますたが、いさましいはたらきをしました。又重成は家康の所へつかひに行き、少しもお



くせず、家康の前へ出て、かきものをうけ取らうとしました。見ると家康のけつぱんがうすかつたので、今いちど目の前でけつばんをしてもらひ、ひりつぱに役目をしとげてかへりました。

重成の十二三さいのころ、小坊主ぼうずが重成をののしつた上、うつてからうとしたことがあつたが、その時重成はさからはずにこ

らへてゐたので、おくびやうものだと人にそしられました。しかし後になつて重成がいくさに出ていきましたはたらいたので、前にそしつた人々も、ほんたうのゆうきのある人だと、かんしんしました。

第十一 こころざしをかたくせよ

イギリスのジエンナーはふとしたことから、種痘しゅとうのことをおもひつきました。人に笑は

れても、少しもかまはず、二十年あまりの間  
さまざまにくふうをこらして、じぶんの子

に牛痘ぎうとうをうゑてみ

た上、そのはつめい  
をしよもつにかい  
て、せけんの人にく  
らせました。

ジエンナーのはつめ



いは、そののちも色々とわる口をいはれま  
したが、たゆまずにけんきゅうをつづけて  
居ました。そのうちに種痘はふがよい法である  
と知れて、ひろくおこなはれるやうになりました。

第十二 物ごとにあわてるな

毛利吉就もうり よしありのおくがたは、きんじよにくわじ  
があつた時、けらいの人人から、はやく立ち



のくやうにとすすめられました。おくがた  
は人人のあわてるの  
をとどめ、まづめいめ  
いがたいせつにする  
荷物をかたづけよ。あ  
わててじぶんの方か  
らも火を出さないや  
うに、火のもとに用心

せよ。立ちのく時には、女こどもはわれとい  
つしよに行くやうにせよ。とさしづをしま  
した。人はおくがたのおちついたさしづ  
にはげまされ、力を合せて火をふせぎまし  
たので、やしきはぶじにのこりました。

### 第十三 じりつじえい

高田善右衛門たかたぜん もんは十七さいの時じぶんでは  
たらいて家をおこさうとおもひ立ちまし

に出かけました。  
道にはけはしい山さかが多かつたが、善右衛門はくるしいおもひをして荷物をはこび上げました。又時々さびしい野原を通つたこともあります。かやうになんぎをして、村村をまはつてあるき、雨の日も風の日も休まずにはたらきました。その後またごふくをしいれて賣りにあるき、だんだんり



た。父からわづかの金をもらひ、それをもとでにして、とうしんとかさを買入れ、遠い所までしやうばい

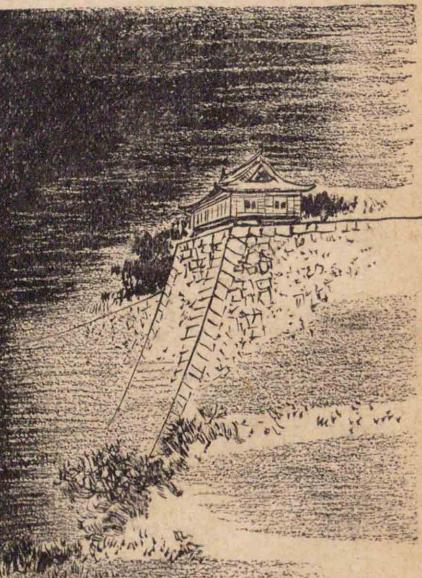
つばな商人になりました。

善右衛門はつねにその子どもに「じぶんが家をおこすことの出来たのは、せい出してはたらいて、けんやくをまもり、又しやうぢきにして利益をむさぼらなかつたからである」と言つてきかせました。

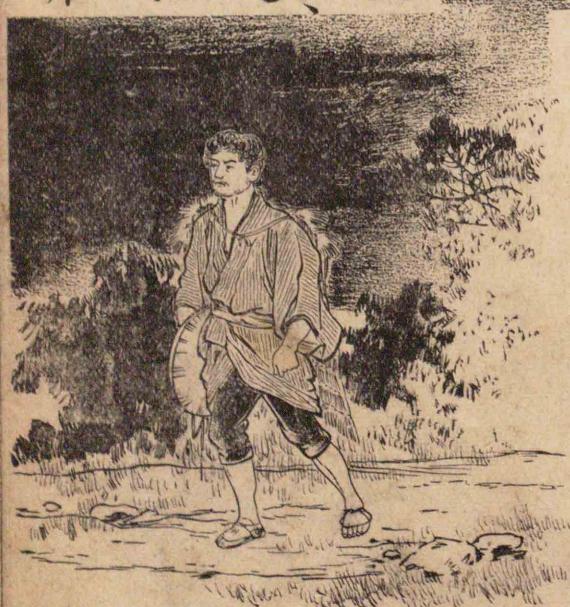
第十四 ちゆうくんあいこく  
明治十年に熊本のしろがぞくぐんにかこ

複甲三四

まれました。しろをま  
もつてゐた谷少將は  
しろの中のやうすを



遠くのくわんぐんに  
知らせようとおもひ、  
その使を谷村計介に  
いひつけました。計介



三十一

三十

はこの時二十五さいでした。

計介はからだにすすをぬり、着物をかへ、夜にまぎれてしろを出ました。とちゆうで、二度もぞくぐんにとらへられ、色々なんぎな目にあひましたが、とうとうわんぐんの本營ほんえいへついて、しゆびよく使の役目をしごきました。

## 第十五 明治天皇



明治十一年明治天皇  
は北國御巡幸の時、新潟縣がたけんで目のわるいものが多いたのをごらん  
あそばされ、それをなほすために御てもと金を下されました。二十三年愛知縣あいちに大元

んしふのあつた時、天  
皇ははげしい雨のふ  
るのに御づきんをも  
めされず、御統監にな  
りました。

明治二十七八年のい  
くさの時、天皇は大本  
營を廣島へ御進めに



なりましたが、その時の御座所はそまつな  
せいやうづくりの一へやであります。し  
じゆうこのおへやにばかりおいでになつ  
て、朝早くから夜おそくまで、御ぐんふくの  
ままで色々おさしづあそばされました。又  
天皇はぢしんこうちくわじなどのさい  
なんにかかつた人民じんみんを度度おすくひにな  
り、三十年と四十四年には貧民救濟ひんみんきゅうさいのため

に多くの御手もと金を下されました。

### 第十六 祝日・大祭日

わが國の祝日は新年紀元節・天長節・明治節であります。新年は一月一日・二日・五日、紀元節は二月十一日、天長節は四月二十九日、明治節は十一月三日で、いづれもめでたい日であります。

大祭日は一月三日の元始祭・春分の春季皇

靈祭・四月三日の神武天皇祭・秋分の秋季皇

靈祭・十月十七日の神

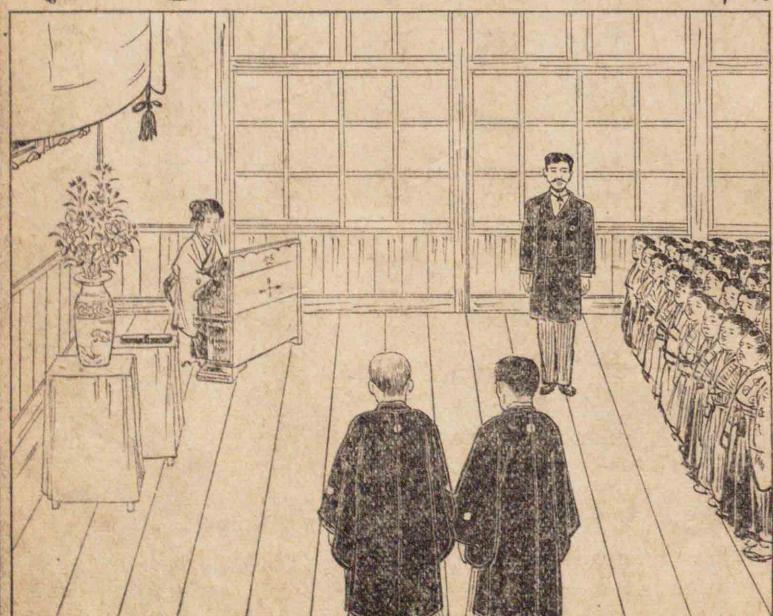
嘗祭・十一月二十三日

の新嘗祭・十二月二十

五日の大正天皇祭で

あります。

祝日・大祭日はたいせつな日で、宮中ではお



複甲三四

ごそかな御ぎしきがあります。われらはようくその日のいはれをわきまへて、忠君愛國の心をやしなはなければなりません。

第十七　しやうぢき

近江の河原市といふ所に一人の馬子がありました。ある日一人のひきやくを馬にのせて、あるしゆくまでおくり、家へかへつて馬のくらをおろすと、多くの金を入れたさ

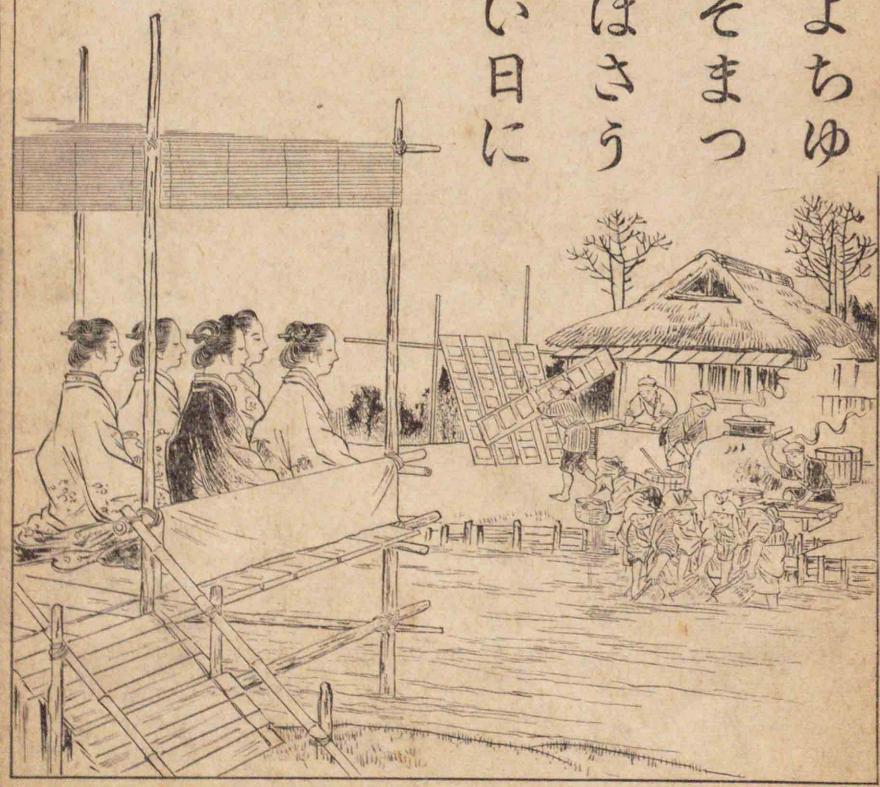
いふが出ました。これはさきにのせたひきやくのわされたものだらうと思つて、すぐ前に前のしゆくへはしつて行つて、ひきやくにそのさいふをわたしました。ひきやくは



大そうよろこんで、この金をなくすると、私のいのちにもかかはります。あなたの御おんはことばでいひつくことが出来ません。』と言つて、おれいに金を出しました。しかし馬子は、『あなたの物をあなたがうけ取るに、何でおれいがいりませう。』と言つて、なかなかうけ取りませんでした。

### 第十八 けんやく

とくがはみつくに  
徳川光圀はぢよちゆ  
うたちが紙をそまつ  
にするのをなほさう  
と思ひ、冬の寒い日に  
紙すきばを  
見せにやり  
ました。ぢよ  
ちゆうたち



は川の上のさじきに居て寒い風にふきつけられながら、紙すき女が水の中ではたらくありさまを見てかへりました。そこで光圏は一枚まいの紙でも、紙すき女がくらうしてこしらへたものであるから、むえきに使つてはならぬ。と言つてきかせました。ぢよちゆうたちはなるほどとさとつて、それからは紙をそまつにしないやうになりました。

チリモツモレバ、山トナル。

第十九 近所の人

佐太郎はうちがまづしかつたけれども、よく近所の人たちにしんせつをつくしました。ある時近所の人の家のやねがそんじてゐるのを見て、なぜなほさないのでですか。とたづねたら、その人が、びんぼふでなほすことが出来ません。と答へました。そこで佐太

郎は村中の家から、わ  
らを少しづつもらひ  
あつめ、じぶんも出し  
て、そのやねをなほさ  
せました。又村の中で  
くわじにあつた人が  
あると、じぶんのやぶ  
の竹を切つて、その人



におくりました。

## 第二十 こうえきをはかれ

佐太郎の村のわうらいの土橋は度度そん  
じて、人々がなんぎをしました。佐太郎は村  
役人となつた時、役人なかまとさうだんを  
して、めいめいのきふれうを少しづつたく  
はへておいて、その金で石橋にかけかへま  
した。それからはながく橋のそんじること

がなくなつて、大そ  
べんりになりました。

その外にも、佐太郎は  
色々と村のこゝ元き  
になることをしたの  
で、つひに村役人のか  
しらにあげられまし  
た。



四十六

## 第二十一 生き物をあはれめ

ナイチンゲールはイギリスの大**地主**<sup>ぢぬし</sup>のむ  
すめで、小さい時からなきぶかい人であ  
りました。ある時ひつじかひの犬が足をい  
ためて、くるしんでゐるのを見て、きず口を  
あらひ、ほうたいをしてやりました。あくる  
日もまた行つて手あてをしてやりました。  
それから二三日たつてナイチンゲールは

ひつじかひの所へ行きました。犬はきずがなほつたと見えて、ひつじの番をしてゐました。が、ナイチンゲールを見ると、うれしさに尾をふりました。

## 第二十二 はくあい



ナイチンゲールが三十四さいのころクリミヤ戦役せんえきといふはげしいいくさがありました。たたかひがはげしかつた上に、わるい病氣がはやつたので、負傷兵しおうや病兵びやうがたくさんに出來ま



したが、いしやもかんごをする人も少いため、大そなぎをしました。ナイチンゲールはそれを聞いて、大せいの女をひきつれて、はるばる戦地へ出かけ、かんごのことにほねをりました。

戦役がすんでイギリスへかへりました時、ナイチンゲールは女帝ちよていにえつけんをゆるされ、あつくおほめにあづかりました。又人

人もそのはくあいの心のふかいことにかんしんしました。

### 第二十三 めしつかひ

おつなは十五さいの時、子もりぼうこうに出ました。ある時主人の子どもをおぶつてあそんでゐると、一匹いっぴきの犬が来て、おつなにかみつきました。おつなはおどろいて、にげようとしましたが、にげるひまがなかつた

ので、おぶつてゐた子どもをおろし、じぶん  
がその上にうつぶしになつて、子どもをか  
ばひました。犬ははげしくとびかかつて、お  
つなにくひつき、多くのきずをおはせまし  
たが、おつなは子どもをかばつて少しもう  
ごきませんでした。

そのうちに人人がかけつけて、犬を打ちこ  
ろしおつなをかいはうして、主人の家へか

へらせました。子どもにはけががなかつた  
が、おつなのはきずは大そう重くて、そのため  
とうとう死にました。これを聞いた人人は  
いづれもかんしんして、おつなのためにせ  
きひを立てました。

## 第二十四 よい日本人

天皇陛下は明治天皇・大正天皇の御志をつ  
がせられ、つねにわが國のさかえと、われら

臣民しんみんのさいはひのために御心をお用ひになります。われらは天皇陛下の御めぐみのふかいことをわすれてはなりません。又祝日・大祭日のいはれをわきまへて、忠君愛國にはげまなければなりません。

父母にはかうかうをつくし、兄弟どうしはなかよくし、めしつかひとなつては主人をたいせつ大切に思はなければなりません。

友だちにはしんせつにし、よくれいぎをまもり、心をくわんだいにし、しやうぢきの心をうしなはず、近所の人としたしみ、こうえきをはかり、生き物をあはれみ、はくあいの道につとめなければなりません。

そのほか、がくもんをべんきやうしきりつを正しくし、からだをけんかうにし、ゆうきをやしなひ、こころざしをかたくし、物にあ

わてないやうにしじりつじえいに心がけ、  
けんやくをまもらなければなりません。  
右にあげたこころえをよくまもると、よい  
日本人になることができます。

をはり

複甲三四

昭和二年十月十八日翻刻印刷  
昭和二年十二月十三日翻刻發行

複式常小學修身書兒童用甲  
第三四學年兒童用甲

定價金七錢

ろ

著作權所有  
發著作兼

文 部 省

兼翻刻發行 東京書籍株式會社  
兼印刷者 代表者 石川正作

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

印刷所 東京書籍株式會社工場

日九十月十年二和昭  
濟查檢省部文

發行所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社

武政鈴年四尋

広島大学図書

2000018263

